

山下清海著：『横浜中華街－世界に誇るチャイナタウンの地理・歴史』筑摩書房，2021年12月刊，283p.，1,700円（税別）

著者は日本をはじめ世界各国のチャイナタウンを対象に現地調査と考察を積み重ね、この研究分野に関する第一人者である。これまでに多くの著作を出版している。最新著『横浜中華街－世界に誇るチャイナタウンの地理-歴史』は今までの研究の集大成といえよう。

本書は、序章のあと、大きく三つの部分から構成されている。まず、章立てを示そう。

- 序章 横浜中華街を歩く
- I 「南京町」から「中華街」へ－形成・伝統・ヤミ市
 - 第一章 もとは入江だった横浜中華街－横浜開港と南京町の形成
 - 第二章 外国人居留地廃止後の南京町－1899～1945年
 - 第三章 伝統的華僑社会の特色
 - 第四章 ヤミ市、「外人バー」街，そして観光地へ
- II 変わり続ける街－対立・観光・新華橋
 - 第五章 華僑社会の分裂－二つの中国の狭間で
 - 第六章 人気観光地への急成長－中国ブーム・中華街ブーム・バブル経済
 - 第七章 横浜中華街の再編成－老華僑と新華僑
 - 第八章 多様化と急変－変わり続ける街
- III 世界に誇れるチャイナタウン－未来に向かって
 - 第九章 日本の中の横浜中華街
 - 第十章 世界の中の横浜中華街
 - 終章 未来へ－これからの横浜中華街

「横浜中華街は、多くの日本人が長い間抱いてきた『中国』イメージを具現化した街である」。

世界各地のチャイナタウンを調査してきた著者は、地理学の視点から、各地のチャイナタウンは、その土地の自然、歴史、社会、経済などの地域環境の影響を受けながら、独自のローカル色を持つと結論づけている。そして、横浜中華街の特色を次のようにまとめている。

横浜中華街には、1859年の横浜開港以来の華僑、日本人、欧米人の交流の歴史が蓄積されてきた。横浜中華街は外国から来た人々、ホスト社会の人々、地域の行政当局の三者が協力しあって作り上げた街である。

本書の副題「世界に誇るチャイナタウンの地理・歴史」で示されているように、本書は地理的視点と歴史的視点から横浜チャイナタウンにアプローチしており、最後に横浜中華街関連年表も付され、読みやすい構成になっている。

序章と第1章では、地図や絵図などを用い、横浜中華街一帯の地形の起伏、砂嘴の形成による地形の特色などを説明し、開港前の半農半漁の寒村の姿を再現している。また計画的に作られた横浜新田の内部の水路や畦道が、今日の横浜中華街の道路パターンに反映されていることを資料に基づいて解説している。

外国人居留地の商館の設立により、中国人は欧米資本の買弁として、また、欧米人のコックや家事使用人、あるいは船舶の荷役労働者などとして横浜に来港した。これが横浜の華僑の起源である。日清修好条規締結後、外国人居留地に華僑密集地域（南京町）が形成され、チャイナタウンとしての形態が整えられていった。欧米人が低湿地であった元横浜新田に増設された外国人居留地を好まなかったため、結果として欧米人と中国人との住み分けが行われた。明治15（1882）年以降、来港する中国人が大幅に増加し、欧米人を超えていった。また当時の南京町に居住する華僑の見慣れぬ生活・風俗は、日本人の好奇的でもあった。

第2章では、外国人居留地廃止（1899年）後の南京町における華僑の生活を述べている。この時期から外国人が外国人居留地の外にも住むことができるようになり、日本人との雑居が進み、華僑による料理飲食業と理髪業の地方進出が進んだ。また、中国革命の父である孫文が、南京町で亡命生活を過ごしたことについても触れられている。

関東大震災で南京町の伝統的な街並みが灰燼と化し、中国人の約3分の1が犠牲となった。さらに様々なデマが広がり、華僑虐殺も起こった。その後の日中戦争により南京町で暮らしていた華僑は「敵性国民」と見なされ、迫害を受け華僑の数が激減した。終戦前のアメリカ軍による横浜大空襲を受け、南京町の中国らしい町並みは焼失した。

第3章では、南京町における華僑の独特な生活を詳細に述べている。華僑の出身地は主に広東、江蘇、浙江、台湾、福建など中国の東南沿海地域である。そのうち広東人は最大のグループで、その多くは珠江デルタ南部の出身者であり、戦前は主に料理飲食業や籐椅子の製造・販売に従事していた。

また、戦前の南京町の華僑は、地縁的結びつきが非常に強かった。その経済活動は「三把刀業」など日本人と競争しない隙間の業種に参入し、日本経済の推移に対応し、時代ごとに特色の変遷が見られた。

華僑は最初の華僑学校「大同学校」等を設立し、熱心に子女の教育を行った。章の最後に触れられた中国人の伝統的な葬儀、「落葉帰根」から「落地生根」へと移り変わることも興味深く記述されている。

第4章は、戦後における南京町のヤミ市、「外人バー」街、そして観光地への変貌を描いている。終戦直後、食料統制が行われたが、南京町はアメリカ軍による接収を免れ、ヤミ市と化し、一時的な繁栄をみせた。当時、南京町周辺には多数のア

メリカ兵が駐留していた。また朝鮮戦争の勃発に伴い、駐留アメリカ兵はさらに増加し、南京町にはアメリカ兵相手のバーやキャバレーが林立するようになった。

横浜市等によって南京町や元町の復興計画の基本方針が作られ、中華街のシンボルである牌楼の建設や道路拡幅などが行われ、南京町は「中華街」と改称された。その後、アクション映画のロケ地になり、暗黒街的なイメージも形成された。

第5章は、中国に対する政治的考え方の違いによる華僑社会の分裂を考察している。大陸支持派と台湾支持派との対立により、中華学校の分裂（学校事件）が起こり、華僑総会も二つに分裂してしまった。1990年の関帝廟の再建に向けて、大陸派と台湾派の協力がようやく見られるようになった。

第6章では人気観光地としての中華街の急成長が取り上げられている。日中国交正常化に伴い、中国ブームが湧き起り、日本人の中国大陸の文化への関心が高まり、中華街ではパンダのぬいぐるみ、茅台酒などの中国物産の販売が増加し、そしてシルクロードブームが到来した。日中国交正常化を機に、台湾支持派のなかには帰化する者が急増した。バブル経済期に入ると、土地を担保に店舗の増改築が行われ、店舗の規模拡大や高層化が進み、中華街の景観に大きな変化が見られた。

第7章では、時代の変化に応じた横浜中華街の再編成が述べられている。中国本土で改革開放政策が導入され、留学や出稼ぎなどの目的で来日する中国人が急増した。その多くは新華僑として日本に残った。また1986年の関帝廟の火災、そしてその再建をきっかけに大陸派と台湾派は政治的な対立を乗り越え、対立から協調へと動き出した。媽祖廟の新設、牌楼の建て替えなどで中華街のさらなる発展が進められていった。老華僑の減少と新華僑の増加などもあり、中華街では大きな

構造の変化が進んだ。

第8章は、変わり続ける横浜中華街を描いている。中国の改革開放後に来日した新華僑のなかには、中華街で中国料理店を開業する者が増える一方、老華僑の老舗の閉業が目立つようになった。また中華街のイメージとは若干異なる店舗の出店や占い店の急増も中華街の多様性の現れといえる。みなとみらい線の開通という外部環境の変化および中華街内部（例えば食べ放題を導入する店の急増）の変化、また年間を通してのイベント開催等により中華街に様々な変化が見られるようになった。

第9章では横浜中華街、神戸の南京町、長崎新地中華街の日本三大中華街の歴史と特徴を説明したうえ、著者がいち早く注目していた新華僑がつくったニューチャイナタウンを取り上げている。池袋チャイナタウン（著者が命名）を日本最初のニューチャイナタウン、西川口チャイナタウンを郊外型のニューチャイナタウンとして、それぞれ位置づけたことは地理学者特有の視点といえよう。

第10章では、世界に誇る横浜中華街を牌樓の有無や数、チャイナタウンの規模から世界各地のチャイナタウンを比較し、横浜中華街の特色を再検討している。また横浜中華街モデルが韓国の仁川中華街に伝播したという指摘も興味深い。

終章では、横浜中華街発展会の理事長へのインタビューとともに、横浜中華街の課題と未来について展望している。横浜中華街はSDGs（持続可能な開発目標）の街になる、横浜中華街はゲートウェイになるという発展会の目標を、評者としても高く評価したい。著者は中華街博物館の設立を期待しているが、評者は横浜中華街自体が立派なフィールドミュージアムだと思う。横浜中華街のファンとして、今後の発展に注目したい。

以上、本書の概要を紹介してきた。著者は大学院時代（山下、1979）から横浜中華街をフィール

ドとしてチャイナタウン研究や華僑の研究を始め、その後、世界のチャイナタウン、華僑・華人社会、多民族社会など幅広く調査研究してきた。本書は間違いなく著者の思い出が最も深い一冊であり、中華街研究のたいへん貴重な成果といえる。本書の「はじめに」から、著者の研究軌跡を知ることができるが、本書は、これから研究者を目指す大学院生や若手研究者に多くのことを示唆している。地域史や日本近代史の観点からも興味深く読んでもらえる傑作である。また華僑社会を深く理解するためにも、本書の購読をぜひ薦めたい。

（張 貴民）

文 献

山下清海（1979）：横浜中華街在留中国人の生活様式。人文地理, 31, 321-348.

漆原和子・藤塚吉浩・松山 洋・大西宏治編：『図説 世界の地域問題 100』ナカニシヤ出版、2021年12月刊、219p., 2,700円（税別）

執筆された方から書評を書けないかと連絡があつて、まだ現物を見ないうちに了解した（外国研究でお世話になった方だ）。本が配達されて、中身を見てみると、殆ど個別の執筆者が100のトピックを書いている。どこから手を付けて良いか迷った。

すでに前号で書評を書いているし、そもそも私は書評を書くタイプではない。だから今回の号はパスしようと思っていた。しかし編集委員長から「書評は本の売上にも影響するのだから、なるべく早く書いた方が良い」というメールが届いた。

全くその通りだと思う（実にプラグマティックな考え方だ）。もし私の文章が気に入ったら、読者の皆さん、校費で一冊を購入して、大学の図書